2024年度日本思想史研究会

代表：文学研究科D２　KIM Nahyeon

日本思想史における

明治初期知識人と学知

目的

明六社の『明朗雑誌』の輪読を通して、明治初期知識人とその学知、またその学知の後世への影響の諸相を捉える。

運営方法

・基本Zoomによるオンライン開催だが、対面とオンライン両方開催するハイブリッド形式の運用行なっている。

・春学期（5～8月）

ZOOMによるオンライン形式で開催。

今年度は『明六雑誌』の輪読報告を行った。

報告者が資料を作成し、それに沿った輪読を行う。

・秋学期（10～1月）

ZOOMによるオンライン開催とともに、一部の例会ではハイブリッド開催を実施した。各自の研究領域を基盤に、春学期の議論と関連させて報告を行った。

主な研究内容

・肖亮「河上肇の社会主義思想と儒学」
・金娜儇「阪谷素の思想に関する一考察」
・渡勇輝「祇園祭における無言詣の変遷―冠者殿社との関わりを中心に」

総括と今後の課題

・『明六雑誌』の輪読を通して近年の『明六雑誌』研究が政治思想のフィールドから大きくなされている反面、宗教や学問など社員の学知を、ましては明治初期知識人の学知の諸問題について捉え直すことができると考えられる。
・また個人の研究報告では輪読の成果を各々の研究の視野を広げることができた。

会誌の発行

・『日本思想史研究会会報』第41号を発行。
石井七海「上総道学における読書とその方法―近世後期闇斎学派による会読の選択的実践」
置文弥「超国家主義とユートピア―大本教の「人類愛善」思想をめぐって」
を論文として掲載した。